

博士論文の和文要旨

| | |
|------|-------------------------------|
| 論文題目 | 川端康成の舞踊小説研究——モダンダンスの振付師的想像力—— |
| 氏名 | 熊澤 真沙歩 |

二〇世紀初頭に知識人や芸術家を魅了した「モダンダンス」は、音楽、美術、文学、映画、哲学、健康科学、服飾などの諸領域にまたがり興行形態や表現手段を変革しながら世界各国で流行した。一九世紀末に進展した急速な工業化・都市化が人為的・合理的な生活条件を整備するなか、経験の標準化と意識の均質化に抵抗し、揺らぎと変容を積極的につくるモダニズム芸術潮流が二〇世紀初頭の文化の最先端を走った。こうした時代背景で身体を媒体とする舞踊のモダニズムとして流行したのが、「モダンダンス」だ。川端康成の舞踊小説は、日本で一九二〇年代後半から一九三〇年代にかけて最も流行した「モダンダンス」を、どのように文字媒体として記録し、どのようにフィクションへ変換したか。

川端康成(一八九九～一九七二年)の舞踊小説は、都市のモダニズムと表現のモダニズムの両方から新しい身体表現を開拓した二〇世紀初頭の「モダンダンス」流行に沿って書かれた。「浅草紅団」(一九二九年)、「禽獣」(一九三三年)、「舞姫の暦」(一九三五年)、「花のワルツ」(一九三六年)、「舞姫」(一九五〇年)を含む舞踊小説のなかに、大衆演芸から芸術舞踊まで広範囲におよぶ舞踊家の姿を川端は描いた。舞踊批評を書き、舞踊公演のパンフレットに推薦文を寄せ、舞踊劇の脚本を執筆するなど、川端ほど舞踊文化と能動的に関わった作家は珍しい。しかし、舞踊・演劇など身体を媒介とした表現と、小説という言語を媒介とした表現を接続する研究は十分に進んでいない。

まず、舞踊・演劇など舞台芸術学研究的蓄積を応用しながら、川端の舞踊小説が書かれた背景となる舞踊状況を掘り起こす作業を第一段階目の研究とする。さらに、ファクトとしての舞踊体験をフィクションとしての小説へ変換する手続きにおいて加えられた想像力や表現的な工夫を分析することが第二段階目の研究である。したがって、本研究の最大の目的は、川端の舞踊小説それ自体がもつフィクションとしての想像力や言語表現の特徴を明らかにすることである。

劇作家や舞踊批評家などの男性登場人物たちは、川端の舞踊小説に頻出の定型ともいえる存在である。彼らは作家川端の舞踊経験と部分的に重なる読み方を許容しつつも、小説家ではない執筆家という微妙なズレを設定としてもつ虚構の人物だ。そうした架空の劇作家・演出家・批評家など舞踊関係者の立場を借りたロールプレイング的な遊戯性を、川端の舞踊小説はもつ。文字だけを道具とする小説だからこそ、架空の劇作

家の立場を借りて、架空の舞踊家の身体へ振付・演出するシミュレーションとして舞踊小説が実験性・遊戯性を発揮する。舞踊家と舞踊批評家と観客側の中間地点に成り立つ川端の舞踊小説が捉えた重要な要素は、女性舞踊家が芸術家として独立・自立する過程の記録だ。本研究が明らかにしたのは、男性観客の視線を意識して踊る女性から、もはや誰かに見られることを必要とせず自分自身のために踊る女性の姿だ。この踊る女性の変容は、娯楽から芸術へ推移した舞踊に対する認識の変容、そしてジェンダーをめぐる女性舞踊家の社会的立場の変容に他ならない。

以上のような見通しから、まず第一章では、長編小説「浅草紅団」(『東京朝日新聞』一九二九年一月二日夕刊初出)を取り上げる。曲芸／浅草オペラ／浅草レビューなど、一九二〇～三〇年代前半の浅草における演芸産業に従事する女性を注視する「浅草紅団」の習作として、三つの初期短編「招魂祭一景」(『新潮』一九二一年四月号初出)の曲馬娘、「林金花の憂鬱」(『文藝春秋』創刊号、一九二三年一月号初出)の曲芸娘、「日本人アンナ」(『東京朝日新聞』一九二九年一月九日朝刊初出)のロシア出身の美少女に注目する。本章では、浅草の大衆演芸を、日本における芸術的西洋舞踊「モダンダンス」の種を培養した土壌と位置付ける。演じる「性」と自らの「性」の連続性／非連続性から、「浅草紅団」の二人のヒロイン「弓子」と「春子」を比較して、「日本モダンダンス」黎明期の女性演芸従事者たちの位置づけの変容を捉える。

第二章では、「日比谷公会堂」の舞踊公演を観に行く「彼」を視点人物とする短編小説「禽獣」(『改造』一九三三年七月号初出)を扱う。素人の域を出ようとせず安価で粗雑な「浅草レビュー」界から徐々に距離を置いた川端は、芸術性を追求する創作的西洋舞踊「モダンダンス」へと関心を移す。一九三〇年代日本の「モダンダンス」流行と連動するかたちで小説の舞台も、浅草から日比谷・銀座へ移行する。同時代の川端の舞踊観劇体験に基づいた随筆や批評をクロスさせて、架空の女性舞踊家「千花子」がもつ文化的背景を検討する。例えば、「千花子」の舞踊経歴は、東アジアにおける西洋舞踊の伝播状況を証言し、また「千花子」が舞踊公演を行った「日比谷公会堂」は、西洋音楽やモダンダンスの公演・情報発信拠点だった点を考慮して、短編「禽獣」がもつ舞踊的背景を立体化する。

第三章では、短編小説「禽獣」の女性舞踊家「千花子」と同じ名前をもつ女性舞踊家「鶴見千花子」が登場する新聞連載小説「舞姫の暦」(『福岡日日新聞』一九三五年一月六日朝刊初出)に注目する。「舞姫の暦」には、「伊豆の踊子」の舞台とされる温泉宿「湯本館」や、「浅草紅団」のヒロイン「弓子」などの既発表の小説と同じ固有名詞や人物名が再利用された自作パロディの側面をもつ。先行する既発表小説と「舞姫の暦」を比較したときに見える最大の違いは、後者が日比谷・銀座を中心とする一九三〇年代半ばの都市文化と「モダンダンス」を交錯させた点にある。名詞の羅列やルビを多用したデパートの記述や、舞踊家名を列挙する「舞姫の暦」は、モダン都市小説であると同時に舞踊文化史の入門書の様相を帯び、アクチュアルな時代相を示す。「モダンダンス」の舞踊家が、創作舞踊の先駆者としてだけでなく、流行を着飾るのに相応しい西洋人型身体をもつ存在として大衆たちの「憧れ」の対象だった点に注目する。

つづく第四章では中編小説「花のワルツ」(『改造』一九三六年四月号初出)における三つの舞踊の場面を取り出して、第三章と第四章で展開した一九三〇年代の舞踊小説のもつフィクション化の特徴を総括する。はじめの舞踊公演でチャイコフスキー作曲「花のワルツ」を踊る場面から、「バレエ」と未分化であった「モダンダンス」状況を確認する。次に、草木に囲まれた「非」舞台上でヒロイン「星枝」が素足になって踊る場面を、「モダンダンス」創始者イサドラ・ダンカンの自然同一型・感情優先型の舞踊スタイルと

して捉える。最後に、欧州から帰国した日本人男性舞踊家「南條」の「びっこの踊」を、欧米由来の西洋舞踊を模倣するだけではない「日本モダンダンス」の新境地と位置付けたい。

第五章では、娯楽が規制された第二次世界大戦下に劇場が閉鎖され、舞踊家の活動が慰問公演など軍事転用された暗黒期を経て、戦後に再び活発化する多様なジャンルの舞踊流行に注目する。バレリーナの「波子」と「品子」の母娘が主人公の川端康成の長編小説「舞姫」（『朝日新聞』一九五〇年一月一二日朝刊初出）には、日本舞踊、モダンダンス、ストリップ、慰問公演、新興宗教「踊る宗教」などのバレエ以外の多岐にわたる舞踊的身体が組み込まれているが、それらの差異や相互性は十分に論じられていない。とりわけ連載開始直前に公演された二つの舞踊劇——日本舞踊家の吾妻徳穂・藤間万三哉による『長崎の絵踏』、江口隆哉・宮操子によるモダンダンス『プロメテの火』——が小説に挿入され、物語と絡み合う意味を考察する。

終章では、本研究全体の論点を整理し、研究としての達成点や学術的成果を総括する。また、今後の研究課題や展望を述べる。

舞踊表現は、必ずしも舞台上だけで生まれる表現ではなく、むしろ日常生活のなかで舞踊家の登場人物たちの動作・感覚・認識と溶け合うかたちで浮かび上がる小説の言葉に潜んでいる。公開と非公開を問わず、「踊り」となる可能性をもつ舞踊の身体性を捉えることが、舞踊を主題としない他の川端文学にも潜在する身体性であると本研究は明らかにする。特に、日常生活と舞台興行との中間地点において舞踊身体が動き出し、物語を進める何かしらの意味が生まれる場面こそが、コレオグラファー的な想像力がアダプターとして最も機能する地点だ。その想像力は、必ずしも舞踊を題材としない小説であっても付与されており、さまざまな小説のなかに舞踊表現を起点とする川端のコレオグラファー的な想像力を探し求めることができよう。

さらにこのコレオグラファー的な想像力は読者側においても機能する。家、稽古場、都市、野外など、さまざまな空間に浮び上がる舞踊身体に光を当てるとは、日常のなかに隠れた「踊り」未満の動きを見つけることだ。身体への繊細かつ複雑な認識をもつ舞踊家を主要登場人物として用いることで、身体を起点とした連鎖的な反応、非言語コミュニケーションの成立／断絶、といった身体と心理が密接に絡み合う没入的な文体が生まれる。川端の舞踊小説を読む行為とは、読者の身体と舞踊に関する個人的体験を喚起し、行間や言葉の隙間を埋め、虚構の舞踊場面を想像する行為なのである。

なお、巻末には参考文献リスト、初出一覧のほか、【付録】として川端の舞踊体験を整理し舞踊史的に重要な出来事と並列した年表を作成した。

以上。

(3791字)